

令和元年 7 月 25 日

企画展示「原爆投下の広島で実相究明に取り組む  
科学者たちの軌跡」のご案内  
(秀敬氏ノートおよび被爆岩石標本「里帰り」展示)

今夏、下記の通り、広島大学文書館、広島大学医学部および原爆放射線医科学研究所（原医研）の所蔵資料をもとに、原爆投下の広島で実相究明に取り組む広島大学医学部および原医研の医学者たちが取り組んだ始動期の軌跡・活動の一端をご紹介します。

また、このたびは、特別展示として広島大学文書館を始めとする関係各所のご協力を賜りまして、2019 年 4 月に中国新聞で報道されました（添付資料参照）地質学教室での取り組みを示す秀敬氏（当時大学院生／広島大学名誉教授）の調査ノートおよび被爆岩石標本を皆様にお披露目いたします。通常は西条（東広島キャンパス）にあります資料の、いわば「お里帰り」です。

是非皆様のご来場を賜れば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。なお、何かございましたら、下記問い合わせ先までご連絡ください。

記

1. タイトル “原爆投下の広島で実相究明に取り組む科学者たちの軌跡”  
— 広島大学医学部および原爆放射線医科学研究所での様相 —  
  
【特別展示】 秀敬氏調査ノートおよび被爆岩石標本
2. 場所 広島大学医学部医学資料館（広島市南区）
3. 期間 2019 年 8 月 5 日（月）～9 月 20 日（金）  
※ 8 月 2 日 14 時～プレオープン（マスコミ向け内覧会（予定））
4. 協力 広島大学医学部 広島大学文書館 広島大学総合博物館
5. 共催 広島大学原爆放射線医科学研究所 広島大学医学部  
放射線災害・医科学研究拠点（広島大学・長崎大学・福島県立医科大学）

## 6. 企画趣旨

原子爆弾の影響は爆弾が投下されてすぐ終わりとならなかった。ある意味、被爆地では 1945 年 8 月のその日から原爆にまつわるさまざまなことが始まり、そして 75 年目をまもなく迎える今でも終わってはいない。1945 年 8 月に日本は確かに戦争を終えた訳だが、被爆地では、この戦争終結による解放の安心や喜びという幸運や空気が、他の地域ほどに人々にもたらされたとも限らなかった。被爆地の人びとは、この、敗戦し、占領された国のなかで、新たな戦い“ヒロシマ”への挑戦が始まることになったのである。

しかし、被爆地の人びとは実に不屈に生き抜いた。そこには、被災し、被爆した本人たちの底力がまずあった。そして彼らを支え、また、その大元（おおもと）となった原子爆弾の影響そのものを調査研究する人々も多くいた。広島大学医学部は、そういったものの 1 つであった。医学部の源流となる広島県立医学専門学校は、1945 年 8 月 5 日に開校式を行い、そのスタートを切ったため、実態としてはむしろ被災した側でもあった。しかし、そこから被爆者医療に尽力すべく調査研究も進めていった。また、その流れのなかで、広島大学には 1958 年に原爆放射線医科学研究所の基盤となった研究組織が設立された。

本展示は、広島大学のそういった初期の活動を中心に、当時の様子的一面をお伝えすることを目的としている。

### \* 特別展示について：秀敬氏調査資料

被爆地・広島には、アメリカや日本（文部省、学術研究会議）の調査団がやってきて、そして調査が済むと彼らは帰っていった。その調査団を受け入れ、また広島はその現場に居続けて被爆者とともに歩んだのが、広島の科学者であり、その一部に広島大学があった。広島平和記念資料館の創立者として著名な長岡省吾は、広島大学の人間として原子野を歩き研究のために被爆石を収集したが、青年であった秀敬氏は、そのそばで同じく調査研究に従事していた。今回はその際の貴重な、そして大変に緻密に書き込まれたノートおよび関連資料を皆様にご覧いただく。

【お問い合わせ先】 原爆放射線医科学研究所 附属被ばく資料調査解析部 TEL 082-257-5877 (担当教員：久保田明子)
--

# 原爆投下の広島で 実相究明に取り組む 科学者たちの軌跡

## ヒロシマに挑む<sup>いど</sup>

—広島大学医学部および原爆放射線医科学研究所での様相—



### <特別展示> 秀敬<sup>ひで けい</sup>氏調査ノート

1945年10月より広島文理科大学（現・広島大学）の地質学鉱物学教室の研究者たちが広島の被爆地に入って調査を行ったが、そのとき大学院生の1人として同行したのが秀敬氏（のち広島大学名誉教授）であった。彼らの調査研究は原爆の放射線の線量推定を検討するのに不可欠であった。今回、医学だけではなく広島大学のヒロシマへ挑む姿の1つとして、この秀氏の調査ノートをご紹介します。

2019年 **8/5** 月 ~ **9/20** 金

**広島大学医学部医学資料館**

10 : 00 ~ 16 : 00 (土曜日・日曜日・祝日・夏季休暇日閉館) 広島大学霞キャンパス (大学病院前)

協力 広島大学医学部 広島大学文書館 広島大学総合博物館

共催 広島大学原爆放射線医科学研究所 広島大学医学部

放射線災害・医科学研究拠点 (広島大学・長崎大学・福島県立医科大学)

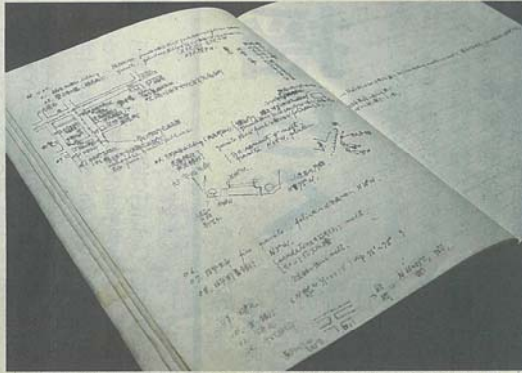
企画・製作

広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部



## 秀氏ら熱線の影響 歩いて調査

被爆直後の1945年10月から12月にかけて、広島文理科大学(現広島大)の研究者たちが広島市内で岩石や瓦を採集し、その場所や特徴を文字と絵で詳細に記したノートが広島大文書館(東広島市)で見つかった。当時学生だった故秀敏・同大名譽教授が手書きしたもので、後になって、原爆が爆発した高度を推定し直す研究などに活用された。2007年に秀氏が死去した後、コピーはあったものの現物は所在が分からなくなっていた。(山本祐司)



原爆が岩石に与えた影響を広島文理科大学の研究者たちが調べ、秀氏が記録したノート (撮影・田中慎二)



秀敏氏

遺族から依頼を受けて広島大文書館が西区の自宅から資料の一部を運び出した際、ノートが紛れ込んだらしい。岩石や瓦などの標本

1つ5点は広島大総合博物館(東広島市)が保管、一部展示しており、ノートも併せて展示を今後検討するという。

# 被爆直後 岩石研究ノート

## 緻密な記録 広島大に現存



調査した場所の一部  
縦21・5センチ、横15センチのノート

た記録である。被爆岩石を研究する田賀井篤平・東京大名誉教授(75)は「秀氏による緻密な記述があった。『秀氏』の『秀』の字が『秀』の字で、岩石や瓦の学術的価値が高まった」と評価する。

ノートは、秀氏ら地質学鉱物学教室の研究者と学生らが計7回、岩石や瓦を拾って歩いたことを記す。生前の秀氏を知る原郁夫・広島大名譽教授(86)によると、当時助教だった故小島丈児名誉教授が指導し、後に原爆資料館の館長となる故長岡省吾氏たちが参加。学術研究会議(現・日本学術会議)の「原爆災害調査研究特別委員会」が10月中旬に広島市内で行った調査を裏づけるように記述している。

ノートは、秀氏ら地質学鉱物学教室の研究者と学生らが計7回、岩石や瓦を拾って歩いたことを記す。生前の秀氏を知る原郁夫・広島大名譽教授(86)によると、当時助教だった故小島丈児名誉教授が指導し、後に原爆資料館の館長となる故長岡省吾氏たちが参加。学術研究会議(現・日本学術会議)の「原爆災害調査研究特別委員会」が10月中旬に広島市内で行った調査を裏づけるように記述している。

## 採集地を手書き

### 表面の変化を観察



広島大総合博物館で展示中の岩石標本を持つ学芸員の佐藤大規さん。今後はノートも展示する計画を練る

ノートの表紙には「広島に投された原子爆弾調査―特にその熱線の岩石、瓦に及ぼした影響」とタイトルが書かれている。黄ばんだ用紙を

めくると、1945年10月27日から12月3日まで7回実施した調査のほかが、48年6月13日の再調査の結果も加えてある。

## 高精度な線量推定に不可欠

### 広島大の静間名誉教授に聞く



葉井篤平氏とともに広島大グループの一員として、個々の被爆者が浴びた放射線量の推定方式「DS02」のとりまとめに携わった静間清・同大名譽教授(70)は「真」は、秀敏氏のノートと岩石標本を研究に不可欠だったと語る。活用し、位相について聞いた。従来の推定方式「DS86」から導き出した線量の数値は、被爆建築物などを実測して得た残留放射線の数値と一致しないという問題があった。より精度の高い計算式を構築する必要がある。そこで、広島で被爆した岩石標本などを1980年代に採集したが、残念なことにあまり残っていない。秀敏氏らの研究によって欠かすことがない。

存在を知ったのは、87年12月。理学部の建物内で保管されていたため、戦後の核実験による放射性降下物にさらされていない。爆心地付近の当時の影響がそのまま残っている点で貴重だった。さらにノートを研究に不可欠だったと語る。前進の決め手となった。

標本とノートにあった書写を照らし合わせ、被爆時の場所を確認できた44点について測定した。病院や広島郵便局などの爆心直下の標本の残留放射線量から推定し、原爆がさく裂した高度を580mから600mに改めた。それを前提に、新たに構築したのがDS02である。あのノートはわれわれの研究によって欠かすことがない。

1回目は、広島駅から東警察署などを経て護国神社までの17カ所。2回目は、福屋百貨店の北側から紙屋町交差点を経て、爆心地付近に至る15カ所。市中心部の電車通りや銀行の位置を正確に書いた地図が残る。

「熱線を穿けたgranite(花こう岩)の面は死んだfresh(新鮮な面となる)」と熱線で表面が割かれた様子を表す。「石のセメントがmelt(溶けた)ことも記す。